

公益社団法人 日本口腔インプラント学会 研修施設



東京形成歯科研究会 NEWS &インプラント国際情報

平成26年9月吉日
№16

発行
編集 東京形成歯科研究会
企画 オクデラメディカル
発行者 奥寺 元

東京都北区王子2-26-2-3F
TEL: 03(3919)5111
FAX: 03(3919)5114

E-mail: okudera@carrot.ocn.ne.jp
http://www.tpdimplant.com/

REPORT

「硫酸カルシウム講演、PRF&PRP、自家 トロンビン製作LIVEセミナーに参加して」

富山県魚津市開業 みたむら歯科医院

三田村 聡



もう15年ほど前になるのでしょうか、その頃まだ一般的でなかったサイナスリフトをLIVEオペにて奥寺元先生が執刀

されるのを横で見学させて頂いたのを今でもしっかりと覚えております。それから何度と研修会に参加しましたが、今回久しぶりにLIVEオペに参加させて頂きました。

最初の講演は台北医学院大学院生体医用材料研究所長、欧耿良先生の硫酸カルシウムについて、硫酸カルシウムと硫酸カルシウムは共に骨成分のハイドロキシアパタイトの前駆体でありリンとカルシウムの原子比率1.5、天然骨は1.6と類似し、密接に関係があり、生体親和性が高いとのこと。エナメル上皮腫症例において広範囲骨切除しリン酸カルシウム骨補填材を使用することで、次第に自家骨に置換されていく経年的な変化は興味深いものでした。インプラントのスレッド試験でも血液との濡れが非常に高く、細胞付着に優れていること、またミクロ・

最初の講演は台北医学院大学院生体医用材料研究所長、欧耿良先生の硫酸カルシウムについて、硫酸カルシウムと硫酸カルシウムは共に骨成分のハイドロキシアパタイトの前駆体でありリンとカルシウムの原子比率1.5、天然骨は1.6と類似し、密接に関係があり、生体親和性が高いとのこと。エナメル上皮腫症例において広範囲骨切除しリン酸カルシウム骨補填材を使用することで、次第に自家骨に置換されていく経年的な変化は興味深いものでした。インプラントのスレッド試験でも血液との濡れが非常に高く、細胞付着に優れていること、またミクロ・

最初患者示説で55歳男性で上顎前歯部の抜歯条件がよければ即時インプラント埋入のオペ説明がありました。事前

に右上2は抜歯、ソケット・プリザベーションしてあり、今回の手術時に治療状態を確認することもライブで観察してほしいと事前説明がありました。他にオペのポイントとして、①歯牙抜歯時のペリオトームの使用法、②切開線の設定、フラップ形成、③全層フラップで剥離の際に切開線部に探針を用いて擦ると綺麗に剥離できる④減張切開の方法、⑤剥離した粘骨膜膜弁で筋層の裏打ちのある骨膜のみ(厚さ0.5mmぐらい)をメスの刃先やハサミで1本線になるように切る④PRF応用のGBR...PRFBOXにてメンブレ作製⑤移植骨材料の種類と選択法・填入法、⑥d-PRFメンブレン(シート・プラスト)の特徴・設置法、⑦縫合手技...マットレス縫合と単純縫合など、オペ中に解説されていました。

そして、本日の患者示説が講義されました。患者は81歳でボディービルダーとして活躍されている男性で、今回上顎、両側臼歯は欠損で前歯の動揺が強くなったため、両側サイナスリフトし、前歯部即時埋入の予定と説明されました。

後の処置として、吸収性コラーゲン膜(バイオメン)をトリミングし四隅に切り込みを入れて裂開部に当て閉鎖。その上にPRFメンブレンを乗せて被覆されました。今回、非吸収性骨補填材としてFDBA凍結脱灰骨として吸収性骨補填材はβ-TCP、トラップで集めた自家骨、PRPさらにリコンビナントBMP-2の使用でした。後ほどの質疑応答でCOWELL BMPは片側1箱(0.25g)の目安で施術と説明されました。

奥寺元先生の歓迎の挨拶の後、欧先生の来賓の挨拶と続きました。そして、奥寺元先生が台湾医科大学客員教授に就任されることになり授与式がとり行われました。本当におめでとうございます。そして蘇先生の来賓挨拶、乾杯で歓談となり、美味しいお酒と料理で話も弾み、楽しい懇親会となりました。

2日目は、午前9時よりライブにて奥寺俊允先生による昨日のオペ患者様の経過報告、手術部位は良好な状態でした。

オペは右側のサイナスリフトより始めました。今回はOSTEM社のラテラルアプローチ・サイナスキット(LASK)で施行されました。このキットの特徴は非常に速く安全にウインドウの形成できる。オペのポイントとして、①開窓部位の設定...動脈部位は避ける。洞底部より5mm上方が最下点とする。②隔壁がある場合はウインドウを分けてもよい。③ウインドウの辺縁は鋭角にならないように滑らかにしておく。

次に左側のサイナスリフトです。あいにく粘膜剥離時に1mm程度の裂開がありましたが、その周りを丁寧に剥離していきます、テンションがかからないようにすると、穴が目立たなくなること。その

欧耿良先生・蘇正堯先生 来日記念 Bioceramic 硫酸カルシウムの講演、 PRF&PRP及び自家トロンビン製作LIVEセミナー 硬組織軟組織再生の効果的最近線

台北医学院大学院生体医用材料研究所 所長 生体医用材料研究の第一人者(台北医学院学長) 欧耿良先生の講演と血液GROWTH FACTORS 臨床応用 PRF&PRP の自家トロンビン製作研究の世界的権威でありアジアで初めての台湾陽明大学歯科系血液再生臨床応用講座の主任教授 蘇正堯先生と東京形成歯科研究会講師による講演とLIVEセミナーを東京形成歯科研究会主催で開催いたします。

日 時: 2014年5月17日(土) 13:00 ~ 18:30
: 2014年5月18日(日) 9:00 ~ 16:00

参加費: 25,000円 (懇親会費用含む)

会場: 日本口腔インプラント学会認定施設
東京形成歯科研究会研修室

血液GROWTH FACTOR 臨床応用 PRF&PRPについて我が国では、10数年前から米国R.MARKらの指導を受けて日本PRP研究会を組織し数多くの発表を行い、その領域の拡大を回りヨーロッパの再生医学組織WCPMの傘下で、国際血液再生臨床応用会議 The International Society of Blood Biomaterials(ISBB)を組織されております。また、最近ではSYFAC フランスのDr.J.CHOKROUNらと連携を取っております。各種学会に発表され国際交流も独自で活発に行っており我が国では、先駆けて極めて学術的に取り組んで臨床に貢献いたしております。今回、新たな見解を含めて実践的な臨床を紹介したいと思っております。今年、11月に台北で開催されます国際再生医学学会の開催に先立ち開催します。この講演会でこれほど学術に裏付けされた内容は他に類を見ませんので、この機会に是非、ご参加ください。

■2014年 6月13~14日 SYFAC 第7回国際Growth Factorsバリ大会参加ツアー
■2014年 11月 4~ 7日 世界再生医学大会台湾大会 WCPM 2014 参加ツアー
■2014年 11月 29~30日 APAID 大会アジアパシフィックデンタルインプラント会議 in 仙台

日本口腔インプラント学会認定教育施設 東京形成歯科研究会 会長 / 国際血液再生臨床応用会議 (ISBB) 理事長
国際歯科美容外科学会 会長 / 医学博士 奥寺 元

■お問い合わせ・資料請求は
〒114-0002 東京都北区王子2-26-2 ウェルネスオクデラビル3F オクデラメディカル内 東京形成歯科研究会
血液再生臨床応用会議 ISBB 事務局 TEL: 03-3919-5111 / FAX: 03-3919-5114 Email: okudera@carrot.ocn.ne.jp



講演: 台北医学院大学院
生体医用材料研究所
所長 欧耿良先生



オペ: 執刀医・奥寺 俊允 先生
(王子歯科美容外科クリニック
副院長)



講演: 台北陽明大学歯科系血液再生臨床応用講座
蘇正堯先生



「欧耿良先生・蘇正堯先生 来日記念懇親会」



コラム

私も、開業医の学術集団の中で日々臨床において、より効果的に安全に先端技術を提供して臨床に向かっています。一方、医学研究においてはその基礎となる大学や公的研究所が存在し、国際的にも医学研究を発信しております。それらの研究活動は、国からの巨額の援助のもとで推進されております。現状はその知名度が低く、恵まれた環境の中においての活動となり、どうしても孤立した環境になりがちである。組織のバックなどの知名度が低くなると、なんでもありで学会における議論などの緊張感がなくなっている。昨今、現状では研究の目的が不明確なものを物語る。今求められていることは、学会や大学の特別研究所などでは、閉鎖的環境を改革する時期が来ているのではないかと、その改革にあたっては、医療の現場につながる臨床医の存在をもっと尊重して、臨床医が更なる研究をするのが可能な環境にするべきではないかと考え。巨額の国税をある組織が独占するのではなく、開業医に密着した臨床医が優遇されるような改革を期待したい。聞かれた学術研究が解放される日まで、私も東京形成歯科研究会は来るべき改革の中心に於ける組織整備を行ってきたい。それが実現できれば無数の研究がなくなり、真に患者のための医療が構築されて、臨床医の存在が高くなるのではないかと。

東京形成歯科研究会 会長 奥寺 元

日本歯科新聞

2014年(平成26年)6月24日(火曜日) 第1840号 (10)

海外レポート

第7回国際シンポジウムSYFACに参加して

東京形成歯科研究会会長
奥寺 元

大会長のDR.CHOUKROUN WORK SHOP



大会長(左から4人目)を囲んだ日本人参加者。筆者は右から2人目。

フランスのパリで6月12~14の3日間、開催された第7回国際シンポジウム (INTERNATIONAL SYMPOSIUM MON GROWTH) SYFACに1314の両日、参加した。

同シンポは、PRF提案の第一人者、DR. JOSEPH CHOUKROUNの理論を結集した内容であつて、日本からは私の他にこの分野で学位取得を目指す東京形成歯科研究会の新進鋭メンバーの渡辺泰典氏、北海道大学で骨再生の研究によつて学位を取得した増木英明氏、さらにこの分野の研究を神奈川歯科大で進めている奥寺俊允氏と、同大学准教授の松尾将人氏、そしてPRF研究会会長の高橋雄三氏、東京・水道橋の講道館歯科クリニック院長、高橋雄三氏とそのスタッフらと一緒した。

世界がPRF理論に注目

13日のWORKSHOPは、自分たちの理論との差を縮めるため、参加者が手分けしてコースを選び、足を運んだ。

私はイスラエル大学のTITZAK BERNANZ教授のコースを選んだ。彼の研究は、再生骨のアンキロス骨への置換によるPRFの理論の展開で、手術的な技法により確実な再生骨のテクニックを紹介した。

このWORKSHOPは私たちがGBRの自家骨およびBM2-BTCPなどでは、いかなる骨のスキュードとしても補填材に成りえなかつた良質な組織的変化を再現した理論と実際の学ぶことができた、大変感激した。

さらに、手術的手法では、フランクフルト大学のDR. BERNHART GISENHARTのバーションアップ手術を久しぶりに見ることができた。彼のテクニックはフランクフルト学派といわれるもので、自家骨を水平の高さでいかにインプラントと癒合させるかというものの。彼の講義はヨーロッパで追っかけているぐらい人気が高い。

14日は世界各国のスピーカーによるPRFのPRFの理論も基づいた研究と臨床症例が発表された。

アメリカ学派のDR. PETER MOYD RIDDENS MARROW、DR. MICHAEL PIKOSなどは、日本でも有名であるが、あまり変わらぬ内容であった。特に世界的にも有名なDR. PIKOSのコースは、PRFを始めたのが一年ばかりと言つて、ことあるか会場からはブライニングも聞かれた。

基礎科学者のAKIKO MAMOTO氏のラットを使った研究「PRF stimulates lung vascular and alveolar regeneration」は、肺と血管の再生効果についての基礎データとしても臨床の指標となった。

他ヨーロッパの臨床家は純粋にPRF APPRIFRを思い通りに取り組んでいた。特にフランスの二人の老練なる教授は、長年の研究と共に新理論と臨床の意義なども話され、形式的ではなく将来の臨床発展の基礎の一つと力説していたのが印象に残った。

「お知らせ」 事務局より

ホームページ刷新に向けて進行中

今秋の完成を目標に、東京形成歯科研究会のホームページのフルリニューアルを進めています。毎月開催されております認定講習会及び研修会への参加申し込みやその講義の映像のダウンロード等をホームページ上で行えるよう、利便性を高めるべくコンテンツを吟味しています。完成次第、改めてご案内させていただきますが、しばらくお待ちいただくようお願い申し上げます。



講演中の DR.CHOUKROUN



講演会場



SYFAC 会場



エッフェル塔



小嶋 榮一 先生の講演「77歳の軌跡とインプラント人生」



小嶋 榮一 先生



小嶋 榮一 先生とご家族



古谷田 泰夫 先生・田中 かずき 先生からプレゼント

平成26年7月13日、ホテルグラン ドパレス(飯田橋)に於いて『小嶋 榮一先生の喜寿をお祝いする会』が主にインプラント関係の先生方によつて盛大に執り行われました。第一部が記念講演会で、発起人代表の塩路昌吾先生、井汲憲治先生の開会の挨拶があり、小嶋先生の「生涯現役」「一生青春」に啓発されたお立場であるという内容であった。そして高橋史人氏の友人挨拶があり、続いて小嶋先生による「77歳の軌跡と歯科インプラント人生」の講演がありました。小嶋榮一先生はインプラント治療40年という日本の草分けで、日本口腔インプラント学会専門医第一号ということもあり、リンコー先生、乙辺先生、他錚々たる先生方とのゆかりがスライドと共に語られました。まさに日本におけるインプラント臨床の創世期から活躍された歴史を興味深く聞くことができた。深井眞樹先生の閉会の辞にて記念講演会は終了しました。続いて祝賀会が行われ、相浦州吉公益社団法人日本口腔インプラント学会専務理事の祝宴開会の挨拶、川添堯彬大阪歯科大学理事、高戸毅東京大学教授、伊藤先生、他錚々たる先生方と、小嶋先生の偉大さに負けないよう医学発展に向け精進しなければならぬと痛感しました。末筆ながら小嶋先生とご家族の健康とご発展を心よりお祈り申し上げます。

藤光政検見川皮膚科医院院長、渡辺大五郎元高見山親方の来賓祝辞が行われました。学術的関係と共に小嶋先生の交友録の深さを理解することができました。その後多数の各会、団体の出席者代表の紹介が行われ、祝電も披露されました。祝電は小嶋先生の国際的に広い活動を反映し、韓国インプラント学会の重鎮の金鴻基先生、台湾インプラント学会元会長のジェームス・シユウ先生、フィリピン国際大学学長のジョセフ・リム先生等から多数届きました。続いて小嶋先生の古い最初の恩師である金田義夫先生(10歳の音頭で乾杯が行われました。和気あいあいのなか、小嶋榮一音楽祭としてアトラクシオンも盛大に行われました。最後に花束贈呈、小嶋先生の謝辞、星野清興先生の閉会挨拶が行われ、この会を通じて日本のインプラントの歴史を垣間見るような意義深いお祝いの会が終了しました。私共師弟にとつて、小嶋先生の偉大さに負けないよう医学発展に向け精進しなければならぬと痛感しました。末筆ながら小嶋先生とご家族の健康とご発展を心よりお祈り申し上げます。



「小嶋榮一先生の喜寿をお祝いする会」に参加して
東京形成歯科研究会 副会長
柳 時悦

東京形成歯科研究会 学会活動報告

2014年9月12日から14日まで開催される第44回公益社団法人日本口腔インプラント学会学術大会に、以下の通り4演題が受理されました。また、ケースプレゼントケーション試験の受験者は4名を予定しています。

＊発表形式：一般口演 ＊演題番号：0-2-8-14
＊セッション日時：9月14日（日） 11：20-12：00
＊セッション会場：第8会場（東京国際フォーラム D棟1階 ホールD1）

インプラント上部構造と食物停滞に関する流体力学的考察 Hydrodynamic consideration about implant superstructure and food stagnation

○木下三博¹⁾ 原田庸平¹⁾ 飯塚智彦¹⁾ 奥寺 元¹⁾
KINOSHITA M HARADA Y IIZUKA T OKUDERA H

東京形成歯科研究会¹⁾
TOKYO PLASTIC DENTAL SOCIETY

I 目的： インプラント上部構造の歯頸部形態および大きさは天然歯とは異なっており、インプラント埋入位置にも左右されるが概ねオーバーカントウアの形態となる。オーバーカントウアの形態は食物の停滞をまねく要素として考えられるが、食物が歯頸部に入りやすいのか、入りにくが入ってしまうとその形態から停滞しやすいのかは定かではない。そこで簡略化モデルを想定し、流体力学の観点から数式を用いて検証を試みることにした。

II 方法： 上部構造および生体は曲面であるが、簡略化するために上部構造、辺縁歯肉の形態、咀嚼食物（以下、流体）の流路を直線化することとした。流体により生じる力は微小面積にかかる集合体であるから、直線化は有効な手段である。流体が外側（頬唇側あるいは舌側）から流路を通り、上部構造と辺縁歯肉により堰き止められる状態を想定した。流体の密度 ρ 、上部構造底部と辺縁歯肉のなす角 θ 、重力加速度 g 、流体上縁から選定した微小面積までの垂直距離 y 、流体の高さ h 、流体の高さから流入路の入り口までの高さ h 、上部構造底面の微小面積 dA 、微小面積に働く力 dF とすると、上部構造底部にかかる力 F は次のように導かれる。

$F = \rho g (h - h) / 2 \sin \theta \cdots \textcircled{1}$ 。①の式に便宜的に $\theta = 60^\circ, 45^\circ, 30^\circ$ を代入し、それぞれの角度における上部構造底面にかかる力を F 、 F とし力の関係を対比した。なお、前提として ρ 、 g 、 h 、 h 、は一定値とし、大気圧は除外することとした。

III 結果： F を1とすると、 $F = 1.22$ 、 $F = 1.73$ となり、上部構造底面と辺縁歯肉のなす角度が小さくなるほど上部構造底面にかかる力が増加するという結果をえた。

IV 考察および結論： 上部構造底面にかかる力が増加するということは、食物が内部に入り込んだ状態では圧力が増加していることを示している。臨床での食物の流れからすると食物の流入圧は様々な値をとるが、同一被検者においてオーバーカントウアの度合い以外の条件が同一であれば、上部構造底面と辺縁歯肉のなす角が小さくなる、すなわちオーバーカントウアの度合いが大きくなるほど食物の流入が生じやすくなると考えられる。現在のインプラント体の形態および歯頸部の径の大きさをからすると容易ではないものの、上部構造のオーバーカントウアを出来るだけ避けることがインプラント周囲炎を予防する方策のひとつであると考察する。

＊発表形式：一般口演 ＊演題番号：0-2-6-3
＊セッション日時：9月14日（日） 14：30-15：30
＊セッション会場：第6会場（東京国際フォーラム D棟7階 ホールD7）

ラクトフェリンが口腔細菌に及ぼす影響 P. gingivalisとの関係 Effect of lactoferrin on oral bacteria Relationship with Porphyromonas gingivalis ATCC 33277

○辻 浩洋¹⁾ 古谷田 泰男¹⁾ 鈴木泰二¹⁾ 磯辺和重¹⁾ 奥寺 元¹⁾
TSUJI K. KOYATA Y. SUZUKI T. ISOBE K. OKUDERA H.

東京形成歯科研究会¹⁾
Tokyo Plastic Dental Society

I 目的： インプラントの治療において口腔内衛生管理すなわち予後の管理は重要な位置にある。インプラント治療においても加齢と共に予後の管理の重要性は高まる。しかし、現状での予後管理は口腔清掃が主体であり、補助的な他の手法を構築する必要がある。これまでに、ウシ由来ラクトフェリン（LF）のインプラント周囲炎予防効果を検討し、報告した。本発表では、LFの持つ殺菌効果を細菌数測定と細菌培養で検討した。

II 材料および方法： 対象人数はボランティアの男女47名。㈱NRLファーマ製栄養機能品LFオーラルフレッシュ（1錠850mg、蛋白質・脂質・炭水化物・N a・ビタミンC・LF50mg5%含有、1日2～3錠服用）とコントロールとしてLFを含まないものをプラセボとした。パナソニック細菌測定装置〔電極捕集・インピーダンス変化測定器〕㈱パナソニック・ヘルスケア社製〕で人の舌苔の菌数測定LEVEL0～7を実施した。服用開始前の測定を術前値とし、プラセボを約1ヶ月服用した後に測定したものをプラセボ値、プラセボ値の測定後にLFオーラルフレッシュを約1ヶ月服用した後に測定したものをLF値とした。測定は、それぞれ一回とした。東京形成歯科研究会の倫理委員会の承認を受けた（倫理審査番号005）。LF単独での効果を明らかにするために、被検菌：Porphyromonas gingivalis ATCC 33277（Pg菌）を、単体LF（0～1280 μ g/mg）を含むBrain Heart Infusion agar（BHIA）あるいはBHIA + 0.5% yeast extractの2種類のプレートに画線塗抹し、プレートを嫌気ジャー（37℃）中で培養して抗菌効果を観察した。

III 結果： パナソニック細菌測定装置による舌からの術前の舌苔菌数はLEVEL平均4.12 $\pm$ 0.17、LFが混入していないプラセボはLEVEL平均4.39 $\pm$ 0.16、LFチェアブルはLEVEL平均3.48 $\pm$ 0.19と変化した。また、LF単独でのPg菌に対する抗菌効果は、いずれの濃度でも確認できなかった。

IV 考察および結論： パナソニック細菌検査測定において、LFオーラルフレッシュの使用後に細菌増殖が抑制されるものと考えられた。さらにLF単体によるPg菌に対する影響は、BHISを用いた培養方法では確認できなかった。これは細菌発育に必要なため、培地に含まれる鉄によりLFの抗菌活性が阻害されたものと考えられる。今後さらなる研究が必要である。

＊発表形式：一般口演 ＊演題番号：0-2-8-13
＊セッション日時：9月14日（日） 11：20-12：00
＊セッション会場：第8会場（東京国際フォーラム D棟1階 ホールD1）

上部構造におけるアクセスホール内の所変化について Changes at in the access hole in the superstructure

○相澤 八大¹⁾ 荻原 道¹⁾ 川端 秀男¹⁾ 佐藤 篤¹⁾ 奥寺 元¹⁾
AIZAWA H OGIWARA O KAWABATA H SATO A OKUDERA H

東京形成歯科研究会¹⁾
TOKYO PLASTIC DENTAL SOCIETY

I 目的： 上部構造の固定方法としてセメント固定及びアクセスホールからのネジ固定があるが、とくにアクセスホール内部の経時的臭気などの変化について報告が少ない。定期観察でアクセスホールの内容物を除去すると悪臭が発生されることがある。この変化は患者のQOLから問題が残る。今回このアクセスホール内部においての臭いと細菌動向について追及したので報告する。

II 材料および方法： 男女10名に対してアクセスホールの中に、小綿球挿入してストッピング仮封した後、その内容物をパナソニックデンタル社の細菌測定器細菌カウンターDEPIM法を用いて細菌検査（単位LEVEL1～7）をおこなった。また、口臭測定は人の臭覚に頼る方法（0～3に分類）とVSC（揮発性硫酸化合物）測定器（ルフレス値）〔㈱チドニス電機製〕（レフレORV値0～180）を用いた。臭気予防対策としてフッ化物の細菌繁殖抑制を期待して、Fバニッシュ材（フッ化ナトリウム50g含有ビーブラント・メディコーデンタル発売）を綿球につけたものを入れて比較した。測定と発表については、患者の同意を受けた。

III 結果： 1～3ヵ月後のアクセスホール内の綿球の臭気は人の臭覚では、1～2の臭いが発せられていた。またVSC（揮発性硫酸化合物）測定器（ルフレ）においてはORV値2～61とバラツキが大きかった。一方、細菌測定器細菌カウンターDEPIMにおいても微小な検体であるがLEVEL2～3が最も多かった。またFバニッシュ材に綿球を付けたものと付けないものとを仮封し、ほぼ一ヶ月後同様に比較し使用したもので臭気で2と3が最も多かった。Fバニッシュ材応用においてはリフレス使用前平均値39.3 ORV値で、使用後は平均値33.8と逆転した。

IV 考察および結論： ネジ固定アクセスホール内部の綿球において人の臭覚1においてDEPIM・LEVEL値の平均は1.00、臭覚2においてDEPIM・LEVEL値は平均2.20、臭覚3において平均3.00と臭覚が強ければDEPIM数値の臭覚が高い数値になり、細菌の増殖により臭気を発することも考えられた。Fバニッシュ材では、臭気予防の1方法であるがリフレス測定では困難と思われた。この事はバニッシュ材のエステルガム・香料等が感知されたと思われる。

＊発表形式：一般口演 ＊演題番号：0-1-7-16
＊セッション日時：9月13日（土） 11：20-12：00
＊セッション会場：第7会場（東京国際フォーラム D棟5階 ホールD5）

歯肉メラニン除去におけるPRF（Platelt-Richi Fibrin） 応用症例

Effect of gingival melanin removal in PRF (Platelt Richi- Fibrin) application cases

○増木 英郎¹⁾ 鈴木 正史¹⁾ 奥寺 俊允¹⁾ 渡辺 泰典¹⁾ 奥寺 元¹⁾
MASUKI H SUZUKI M OKUDER T WATANABE T OKUDERA H

東京形成歯科研究会¹⁾
TOKYO PLASTIC DENTAL SOCIETY

I 目的： 近年歯科において、患者の美容審美的思考が強くなり、できる範囲で天然歯に近づく治療が求められてきている。同時に歯槽骨・歯肉形態や色素についても同様な要求が出てきている。私どもは、歯槽骨・歯肉形態修正において多血小板血漿（PRP）及び多血小板フィブリン（PRF）を持つ効果を応用して治療促進を含む審美を求めた形態再生の効果を発表してきた。この度、歯肉軟組織の審美障害をもたらすメラニン色素沈着除去に応用して、患者の痛みの緩和と治療促進を含み審美的効果を挙げた症例を紹介する。

II 材料と方法： 患者は共に喫煙既往があった50代の男女で歯肉部には著明なメラニン沈着が認められている。患者の要望もあり説明と同意を受けた後に実施した。実地方法はメラニン除去はハイパワーDIODE LASER 30W出力（米国PREMIER社）で浸麻後歯肉上皮をピーリングを行い、メラニン色素の部位を拭い取方法を試みた。メラニン部位が完全に除去された部位に、18ゲージの採血針により採血した40cc血液を遠心分離器出試験間10ccずつ入れて15分間回転しパuffyコートから切り離して、特定のシートで圧縮し、製作したPRFを創面に覆いかぶせて固定する。その治療過程を客観テストVisual analog Scale (VAS) テストと肉眼で観察した。

III 結果： 歯肉上皮表面剥離においては、術直後から、外部にさらされて苦痛を伴う、今回剥離上皮をPRFで覆い被せるため、その違和感も訴えなかったVAS値においても低かった。又新生肉芽組織も1～2週間のうちに置換され組織回復も早かった。

IV 考察及び結論： 歯科治療に於ける患者の審美要求は不可欠のものとなっており、メラニン色素の除去も例外ではなかった、然しその治療過程で患者に苦痛を与えるものであったが、今回この方法を取るにより違和感を最小限にすることが出来た。治療も促進できた。すなわち患者が求められるQOLに寄与すると考える。

